

〈資 料〉

モダニズム、ポストモダニズムと組織分析(2)

——ミシェル・フーコーの貢献——

崔 潤 鎔

《要 約》

組織分析の観点から、モダニズムとポストモダニズムの基本含意を検討する4回企画シリーズの2回目当たる本資料では、この分野におけるフーコー(Michel Foucault)の貢献を取り上げる。フーコーの作業は、全体的には、アングロ・アメリカンの知的伝統を受け継ぐ問題意識の産物として理解できるが、問題へのアプローチ方法や認識対象を秩序化する仕方からは、破格的ともいえる相異なるオルターナティブを提示している。彼の作業は、用いられている方法論や関心の変遷から、3つの時期あるいは領域に分けて理解することができる。彼の主な関心領域は、考古学の時期(archaeological period)を経て、系譜学の時期(genealogical period)へと移っていくなかで多様な変貌を見せることになるが、他にも、明白な時期区分の見分けはつかないものの、倫理学(ethics)への関心も注目される。一連のフーコーの思惟概念は、組織理論の再構成、とりわけ組織の異質性と同質性をめぐる議論、組織生活をトータル・インスティテューション(total institutions)の側面から把握すべき必要性、さらには性(sexuality)の組織的統制、新しい組織統制技術の役割などの論点と関連して、有益な論点を提供してくれる。

1 はじめに

フーコーの思惟概念を組織研究への適用可能性という観点から問題にする学問的関心は、従来以外に注目されなかった問題領域でもあるが、彼が1984年、57歳で不意の死を遂げることによって、実質的に中断されていた。本稿では、ポ

ストモダニズム論争のなかでのフーコーの位置づけを試みた上で、現代組織分析の観点から彼の影響力のもつ意味と重要性を検討する。

前号 (Cooper and Burrell 1988、『経済学論集』第21巻第2号) において検討されたように、モダニズムとポストモダニズムの論争は多様な様相の下で展開されてきたのだが、あえてまとめてみると、バタイル (Bataille) からフーコーを経由してデリダ (Derrida) へと繋がるフランス現代哲学の問題提起に対する、モダニズムの立場からのハーバマス (Jurgen Habermas) の弁護という形で特徴づけられる。フーコーとハーバマスは、1983年と1984年に2回直接対面する機会にめぐまれるものの、対立点についての鋭い意見交換は行われず、論争の焦点は残されたままになっている。二人の主人公は、「モダニティ (modernity)」の概念についても (Dreyfus and Rabinow 1982: 109)、また「啓蒙 (enlightenment)」の概念に対しても (とりわけ、カントの役割についての理解とかかわって)、それぞれ異なる見解を示していて、意見の接近は望めそうもなかった。

つまるところ、ハーバマスは、モダニズムについてのフーコーの認識は、人間理性の発展についての的はずれた攻撃に基づいていて、ましては、なぜ「現在」を批判的に捉える必要があるか、どのような政治的メッセージを返す必要があるかなどについて、ほとんど有効な説明を行っていないと批判する。一方、フーコーは、自分の著述がポストモダニズムの名の下で論じられている事態さえほどよく思っていなかった。結局彼は、自分の著述に向けられる如何なる批評のラベルも拒否することになる。にもかかわらず、モダニズムについてのフーコーのクリティックは注目に値するものであり、彼の希望とおりに多様な解釈の可能性を開いとく必要があると考える。

フーコーは、1970年からパリで「思想体系の歴史 (History of Systems of Thought)」の教授をつとめる傍ら、一連の共通テーマが確認されるテキスト (Foucault 1973, 1975, 1977a, 1977b, 1977c, 1979) を出版している。しかし彼の著作は、ある実用的な目的を達成するための「巨大理論 (grand theory)」を構築するために意図されたものではなかった。むしろ、大量の詳細な記述的分析を手段として、一般に容認されている通念を拒否し、さらには立ち向かう

作業へ張り詰めていた。公の議論の場に好んで招待されてからは、じつはしばしば招待を頼み込んでいたのだが、実験的な仮説を熱っぽく語り、討論にぶつかり合う彼の態度は、少なからず見かけられている。彼は、思考様式の転換を強く求める因習打破主義者でもあった。彼の華麗な行動様式は、時折即興的で不可解な行動として受け止められていたが、じつは綿密に意図されたものであった。フーコーの思惟概念をアングロ・アメリカンの見方と完全に一致するものとして理解するのは過ちである。確かにフーコーの問題意識は、哲学的理想主義によって色濃く支配されてきた長いヨーロッパの知的伝統の産物であることは事実であるが、彼は、ヨーロッパ伝統の経験主義認識論を批判的に疑い始めたのである。著述のなかに用いられている複雑に絡み合われた文体も、確信に満ちた「明白な散文体 (clear prose)」の記述への反発であり、その制約と限界から脱出しようとする自意識の現われとして理解できる。したがって、彼の記述様式は、伝統的な感覚の理論的立場の固定された枠を固執しない。むしろ、問題へのアプローチ方法や認識対象を秩序化する仕方とかかわって、従来とは区別される代替案を強く提案するのである。さらに、また、フーコーの考え方は因習打破主義的な立場のみで首尾一貫した説明ができないこと、彼自身ある特定の立場に落ち着くことを拒否しているところに注意する必要がある。ここでは、説明の便宜上、彼の作業を2つの方法論に分けて、検討することにした。

2 考古学の方法論

フーコーの初期の著述は(英語版は、1977a, 1975, 1977b, 出版されている)、精神医学 (psychiatry)、医学 (medicine) と人文科学 (human sciences) の成立といった従来の学問的伝統からは馴染みのない刺激的な研究対象を取り上げ、西洋文化の下でこれらの対象領域がそれぞれ「正気 (sanity)」、「健康 (health)」、「知識 (knowledge)」といった概念との結び付きから論じられてきた事情が検討されている。

また、彼の博士論文のもとになっている、『狂気と文明 (Madness and Civilization 1979a)』では、「理性の時代」における狂気の歴史が、西欧思想に

における「対象の分割 (target divide)」の出現を説明するために取り上げられている。17世紀の半ばヨーロッパでは、広範な地域にわたって、社会の正常状態から逸脱したものについての大きな排除措置 (the great exclusion) が取られ、異常性格者や変質者などが新しく設けられた精神病保護施設に監禁される事態となった。しかし、18世紀の末には精神医学知識の進展に伴い、狂人を扱う新しい方法が取られることになる。狂人は病人として認識され、病気の進展状況が定期的にチェックされることになり、狂気は医学専門知識の研究対象になったのである。1780年代を機に狂気の歴史は、大きな転換を迎えることになる。

狂気についての考古学的考察とともに、医療施設 (医学的講習と制度を含む) についても同じ考察が『病院の誕生 (The Birth of the Clinic 1975)』のなかでなされている。この書物は、みずからの陳述を通じ真実 (truth) と虚偽 (falsehood) を区別、設定することができる自己構成的専門家階級を取り上げる。独特な歴史的分析方法が取られているが、フーコー自身これを「考古学 (archaeology)」と名づけた。この方法論は、その後『事物の秩序 (The Order of Things 1973)』においてより体系化されることになる。このテキストの目的は、発達史の科学 (science of natural history) と共通する構成ルールをもつ「未熟状態の科学 (immature science)」の歴史を概観することであった。たとえば、経済学や文法は、存在が見せられるとそれを記述する。このような構成上の主体性のないルールは、論述が構成され生産される推論的な実践過程と関係がある。時代を代弁する思考あるいは認識が変わってくると、その構成ルールも歴然と変わるし、それらの間には何の関連性も確認されない。19世紀になって、時代の概念が人生、労働、言語などへと変わってくるとそれに相応する形で生物学、経済学、言語学などの分野がそれぞれにぎやかになってくる。これらの新しい学問領域は思考の新たな対象物を見つけ、新しい言語の秩序としてのディスクール (discourse) を構築する。フーコーによって主張されるディスクールの自律性の観点からすると、いずれ知の主体は去っていき、それにとってかわって生き残るのは、ディスクールのみである。

『知の考古学 (The Archaeology of Knowledge 1977b)』では、フーコーの初期時期の方法論的総括がなされている。真実は実体についての正確で科学的な

表現であるゆえに受け入れなければならないとする「理性の歴史 (History of Ideas)」を受容することを拒否し、考古学は真実そのものを、意識的な話し手の独立したディスクールの個別システムのなかで規制され生産された陳述の体系として認識するのである。考古学的方法論は、ディスクールが形成され、また受容される形態が不連続的であることを前もって前提する。確認できるのは散漫な多様性であり、時には何の道徳的妥当性もない、ただの言語の体系に過ぎないのである。

このようにフーコーの初期の作業は、人文科学の成立とかかわる推論や文学の領域にもっとも優先的な関心を寄せている。とりわけ集中されたのは、狂気と病気にかかわるディスクールについてである。人文科学の成立は啓蒙の伝統を受け継いで花咲いた唯一の発現形態ではなく、特定時代の土台となる構成認識としての「エピステーメ (episteme)」と「記録 (archive)」の観点から把握される必要がある断片的で個別的な発現形態に過ぎないのである。フーコーの初期作業において主体の問題はそれほど注目されていない。ディスクールを発するものが誰かが重要ではなく、ディスクールを通じて発せられた内容が重要であるからである。フーコーにとって、唯一の歴史、唯一の主体は存在しない。進歩と理性の歴史は棄却されるのである。

以上のような主張から、初期フーコーは構造主義者 (structuralist) として認識される場合が多い (White 1979, Dreyfus and Rabinow 1982)。しかし、彼自身はこのようなラベルを明白に拒否するのである。にもかかわらず、フーコーを構造主義者として理解する論拠は十分にある。彼は、理論的関心から意識と主体の問題を排除する。彼の著作のなかで人間は、ただの対象物としてのみ認識される。さらにフーコーは、ディスクールの多様性のなかで共通した特徴を取り出そうと努める。散在している個別的な実践から基本的な共通性を抽出しようとするのである。ディスクールは科学的に構成されているにせよ、そうでないにせよ、文学的なツールと概念によって分析される必要がある。ホワイト (H. White 1979) は、フーコーの構造主義的な側面についての議論のなかで、フーコーの初期著作の考古学的方法論を支えているのは言葉の比喩的表現の理論 (theory of tropes) であると主張する (Morgan 1980, Bourgeois and Pinder

1982)。類推と差異を通じた分析が焦眉の関心事だったのである。

しかし、構造主義の他の特徴との関連からフーコーが論及された例はほとんど見当たらない。たとえば、地質学的メタファーを受容していたことについても、事実主義の存在論的立場についても、マルクス主義の分析枠との関連からにしても、言及されていない。事実、フーコーと同時代の構造主義の同僚であり師匠でもあったアルチュセル (L. Althusser 1969) との間には、根本的な差異があるように見える。確かに、初期フーコーの考古学的分析への傾倒には、歴史と科学的実践についてのアルチュセルの見解に対する反発の意味合いが含まれていた。にもかかわらず、1960年代後半の考古学時代のフーコーは、準構造主義者 (quasi-structuralist) として特徴づけるのが妥当であろう (Hoy 1986: 4)。そこからは、ハーバマスや他の人文主義のモダニスト・プロジェクトとの親和的關係が確認される。興味深いのは、フーコー自身が一連のインタビューでの陳述のなかで準構造主義との親和的關係を否定している点である (Rabinow 1984)。ディスクールの強調で特徴づけられる考古学的方法論から、推論を容認しない立場に変わり、系譜学の観点から権力のイシューへと傾倒していくフーコーの方法論の変化が読み取られる。

3 系譜学的方法論

一時フーコーは、系譜学とともに考古学の補完、強化を試みた時期があった。しかし、後期の著述のなかで二つの方法論の間隔は更に広げられ、考古学はごく部分的にしか用いられなくなった。系譜論者は、権力と知識、そして人間身体が存在様式に関心を寄せる診断医であり、それらの間の相互關係に注目する。考古学的方法論のなかからは、理論よりも実践の重要性が確認されたのだが (Dreyfus and Rabinow 1982)、さらに系譜学との関連からは、実践そのものを外部の観察者の視線からではなく、内部者の視線から見る観点が重んじられるようになる。このような新しいスタンスを展開するに当たって、フーコーはニーチェ (F. Nietzsches) より方法論的基礎の多くを継承している。二人とも、歴史行進の後ろに横たわる付随的な事柄や出来事、偽り、そしてこれらの発生源、さらにはこれらのすべてのもっとも底辺から響いてくる高い音程の物語に耳を

澄ましていた。かくして、系譜学は伝統的な歴史、根本的な法則や究極性への探求と対立する立場を企てる。考古学と同様に、系譜学も連続性ではなく、不連続性に注目するが、奥深さへの追求を放棄する側面において初期の立場を覆した。系譜学は、表面的な特性、そして意外性の事柄に関心を傾ける。現実の事実関係が、底辺に潜んでいる実在の内容を十分に反映しているのではない。現実についての我々の知識は、権力関係によって拘束されるのが通常である。かくして、権力と知識、人間個体の絡み合われた諸関係は系譜論者の方法論上の標的となる。

フーコーの初期のテキストは、このような関連についてそれほど注目していない。ここで、これらの関連についての系譜学の理解と内容をより詳細に検討することにすると、それは組織研究とかかわってフーコーの適用妥当性を論じる場合、もっとも重要な事柄になるからである。『監視と処罰 (Discipline and Punish 1977c)』、そして『性の歴史 (The History of Sexuality, Volume I 1979)』がさしあたり検討対象となる。

フーコーの著述は全体的に歴史的理解の重要性を強調しているが、それは過去それ自体への関心からではなく、現在をより深くコミットして理解するためである。フーコーは、自分が系譜学に関心を持つのは、過去を再構成するためではなく、過去の中に痕跡付けられている現在の本源的形態を探すためであると主張する (Foucault 1979, Weeks 1981)。歴史的に、西洋世界のなかで特徴づけられてきた2つの支配様式が、フーコーによって確認されている。それは、「伝統的」、そして「監視的」支配形態と呼ばれるもので、厳格に対照的な性格を持つ。『監視と処罰』は、1757年3月2日に執行された恐ろしい大逆罪処刑場面を次のように描写することから始まっている。

少年の胸と両腕、太股、そしてふくらはぎまでもが、鮮血に血塗れたはさみで引き裂かれていった。尊属殺人に使われたとされたナイフを握っている右手は、硫黄がぐらぐらと沸き返る炉のなかに入れられ、その上に燃えるような鉛の溶解液、油、樹脂、そして再び硫黄が注がれた。やがて体は引き出され、四匹の馬によって四等分されたあと、最後に、少年の四肢と体は燃やされた... (Foucault 1977c: 3)

80年後、「パリの若い受刑者の家」では次のような描写が出てくる。

夏の場合は7時半、冬の場合は8時半、囚人たちは中庭から独房に戻らなければならない。手を洗い、服装を整えることは言うまでもない。その後、1番目のドラマがなると服を脱ぎ、2番目のドラマがなるとベッドのなかに入らなければならない...
(Foucault 1977c: 3)

上記の対照的な記述は、前者が執行についてであり、後者は時間割りについてである。支配の伝統的様式と監視的様式の性格が対比されている。身体的な処罰を遂行する公的様式が、1世紀も過ぎないうちに伝統的様式から監視的様式へと取って代わられた。伝統的様式の残酷な見物は消え去った。処罰は、最初幾つかの孤立した場所でゆっくりと始まったのであるが、次第に精神や心、意志の統制へと向けられた。極端な暴力は、身体をスピーディに消尽させ、場合によっては死に至らせる。しかし、より複雑で巧妙な矯正や訓練形態が暴力の処罰に代わって設定されるようになったとフーコーは把握する。彼は、われわれの現代社会は警察や国家防衛機構の目に見える統制の下で維持されているのではなく、また共有された価値システムによって維持されているのでもなく、労働の日常における監視の内密なテクニックによって維持されているのだと主張する。

このような完全で厳格な組織の展開についての説明が、フーコーによってよく好まれ記述されている。監視と直接的な観察のテクニックは、18世紀のペンシルヴェニア、トスカナ、そしてフランス、プロシアの新しい監獄、また教育や軍隊システムにも採用されることになる (Sunesson 1985)。新しい監獄と病院、工場、公営住宅団地、学校、兵舎など監視の時期の他の組織との間には驚くほどの類似性があった。ベンタム (Jeremy Bentham) によって設計されたパノプティコン (Panopticon) は、囚人や労働者など収容者の一挙一動を監視できる展望台を中央に持つ円形建物だったが、フーコーはこれを監視的支配様式のメタファーとして捉えている。監視組織の幾何学的構成は、直接的な監督と観察を目指した明白な目的で作られたものである。

また18世紀は、操作と訓練の対象や目標として人間の身体に多大の関心が寄せられた時期でもあった。人間の身体は機械として概念化され、機械的な再整列と調律が施される。この発見は、人間身体についての「政治的解剖学」へと発展していく。個人の単位のなかに浸透してきた権力は、身体のなかを駆け巡り、ジェスチャーや姿勢、態度の形成へと普及していき、やがては、他人と協働し付き合う仕方にまで影響を及ぼすのである (Foucault 1977c: 28)。生活のもっとも微細な特徴までが、きめ細かく分析され調査される。かくして、細心な規制、気の抜けない観察、極端に直接的な監督などが敷かれるようになる。学校児童の姿勢や、兵士の行進ステップにも多くの関心が寄せられた。組織生活の隅々まで、監視が巡らされ、規制される。監視は次第に細胞システムを形成し、空間内の個人へ集中される。行動のためのスケジュールが作られ、身体の正しい動きを統制するためマニュアルが作成され、やがて正確な指揮の経済的システムが立ち上がる。個人は、測定され、記述され、評価され、調査され、比較される対象物となる。要するに、身体は神秘性を失うのである。

さらに、生命力 (bio-power) についての探求の発達によって、人口の統制、人間身体 of 征服を達成させるための数多くの多様なテクニックが爆発的に提出された。これらの一連の技術体系は、性への関心へ集中されるようになった。なぜなら、性は2つの問題軸の中心であると考えられたからである。1つの軸は、生命体としての身体とそれをコントロールするための問題であり、もう1つの軸は生命体の種 (species) を如何に規制し支配するかとかかわる問題領域である。監視社会において、性は次第にもっとも優先的なコントロール目標化されていった。性に関するディスコースの増殖は着実に拡大されていく。19世紀において性は、一層活発に分析され、分類され、細分化され、検討された。4つの基本的なカテゴリーが認識されている。「ヒステリー性の女性」、「自慰行為をする児童」、「マルサシアン・カープル (Malthusian couple)」、「不道德な大人」などに対して規制が取られた。人間の行為を正常化させるための数多くの試みがなされ、個人は同質な社会的集合体的一部分として見なされた (Foucault 1977c: 184)。人間の間の個人差は認識されていたものの、それは正常的な標準からそれほど外れない範囲においてと限られていた。正常的な標準

は、解剖学者、医師、健康診断師、人口統計学者、祈祷師、教師など人間の精神や身体に関心を集中する多様な専門家集団によって設定された (Melossi and Pavarini 1981)。

生命力は、軍隊のような実存する組織から追求され、社会的単位の組織化過程への移植が試みられた。政治的解剖学と生命力についての探求は、病院、監獄、収容所、公共の住宅団地、大学、学校などの成立と成長に基本的な土台を提供した。今日、正常化の機能は、「監視」の周辺に群がる補助的権威の一連の全体によって遂行されている。たとえば、教育者、精神科医、心理専門家、看守、治安判事などが彼らの目の前の対象物について判断を下し、矯正に当たっているのである。フーコーは次のように主張する。

正常性についての判断は、現実の至る所で行われている。われわれは、教師の判断、医師の判断、教育家の判断、社会事業家の判断などで成り立っている社会のなかに生きている。普遍的な標準は、彼らの判断に基づいて決まるのである。かくして、各個人は自分の身体、ジェスチャー、行為、才能、達成などのすべてが統制されているのを知るようになる... (Foucault 1977c: 304)

監獄は、フーコーが監視権力と呼ぶところの極端な形態に過ぎない。監獄の境界は刑務所の壁を越えて外へと拡大されつつある。現代社会の組織的土台のなかで、われわれが確認できるのは、多様な権力の形態ではなく、官僚的、軍事的、管理的形態で集約された単一化された権力装置のみである。フーコーにとって、権力は事物のなかに内生的に存在するのではなく、体系的に関連付けられた関係のネットワークのなかに存在する。

監視的権力は、人間の毎日の日常のなかに投与され、また日常のなかで再生産され転換される。それは、個別的に、規則的に、また連続して機能する。それは組織の外から入ってくるものではなく、教育、治療、建築、製造などのプロセスのなかで形成される (Donzelot 1980)。したがって、個人の身体は、政治の場に直接的に包摂されてしまうのである。権力が即時それを捕まえ、投与し、操縦していく (Foucault 1977c: 27)。

フーコーは権力を、社会的な生活についての「ミクロ物理学 (micro-physics)」の観点から概念化することを試みる。ここでの権力は、恒常的に緊張関係のなかで動いている、細かく分散された権力関係が確認される。しかし、これは「支配の全体的な単位」、「監視の全体性」の始まりなのである。やがてこれは、支配的な監視様式へと広がり、社会生活の至る所に偏在するようになる。監視は、その状態がある挑戦を受け、簡単に変更されたり覆されるものではない。それは、個人の身体の日常を構成する周到な一部分なのである。

監視権力についてのこのような観点から、楽観的な展望は許されない。しかし、ここから「抵抗の本質」を読み取ることができる。少なからず論者が、監獄は被収容者についての監視機能を全く適切に遂行できなかったと指摘する。従順の創造よりは、暴動、不法的行動、規律の欠如といった修飾語が現代監獄の特徴を説明する飾り言葉になっている。このような抵抗のはびこりから、監視社会の典型的な形態としての監獄についてのフーコーの観点は棄却されるのだろうか。そうでない。フーコーにとって、抵抗は権力関係の外に位置づけられるものではない (Foucault 1979: 95)。権力の存在は、権力関係のなかで敵と目標、支援、操縦などの役割を遂行する抵抗の多様な側面に依存するものとして見なされる。したがって、抵抗は監視のもう1つの側面である。監獄は、抵抗の無用と監視の重要性を説明するために存在する。抵抗の存在は監視が脅威されているのを意味するのではない。抵抗と権力、監視についてのこのようなフーコーの観点は、組織権力についての伝統的なアプローチを理解するに当たって多くの示唆点を提供してくれる。

フーコーは、また、考古学と系譜学から倫理学の地平への変身を試みる。ここでは、アングロアメリカンの伝統とは相当異なる倫理についての概念化が示され、グリックローマンの倫理と現代クリスチャンの倫理の間の不連続性が検討されている。ディスクールについての考古学的研究、そして権力についての系譜学的研究から倫理学への研究を区別するために、フーコーの関心は2千年もの先の時代へ溯る。後期の作品は、フーコーが『性の歴史』のなかで予定したものではなかった。ここで、フーコーの著述の主な資料の群落へ再び戻って見ることにしよう。

4 考古学と系譜学の比較

〈表1〉は、フーコーの著述のなかで確認される、2つの方法論の内容の比較を試みたものである。そこには、反近代主義者としてのフーコーの特徴は確認されるものの、2つの方法論の間の連続性は明らかではない。2つの時期において共通しているのは、歴史を全体化しようとする観点についての反対であり、それは社会変化の不連続な断絶、主観へ分散化して行くことへの関心、人間の進歩と啓蒙の思想についての懐疑などの形で現れている。

〈表1〉 考古学と系譜学の比較

考古学の方法（同質性の把握）	系譜学の方法（差異の把握）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的実践を支配し規制するルール、内部行為者に告示されていない規則の暴露。 ・ 「容認された真実」を疑い括弧のなかに入れることによって、制度的な拘束から部分的な逸脱を達成することは可能である。 ・ 発掘する行動。深層と内密性を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ こまかい細部、重要でない変更、微妙な輪郭の意味を考察するため、表面的な事柄の特異性を記録すること。 ・ 固定された本質、基本的な法則は存在しない。不連続性と任意性のみが存在するだけである。世界は現われ次第で把握されるのだから、誰もが「皮相的な神秘」を探し求める。 ・ 事件や機会、偽りの記録者としての行動。深層と内密性の暴露に反対する。

確かに、このような概念化と観点における変化に問題がないわけではない。最近、フーコーに向けられた少なからず批評が提出されている（Gane 1986、Hoy 1986）。性に関する彼の観点（Weeks 1981、Brake 1982）、そしてディスクールのついでの初期の集中（White 1979）、マルキシズムについての見解、悲観主義、権力の集中についての見解（Fine 1979、Minson 1980、Smart 1983）なども批判の標的になっている。しかし、本稿で検討しようとするのはフーコーの著作の肯定的な側面とその組織分析への妥当性についてである。

5 組織分析におけるフーコーの含意

組織理論とフーコーとの接点という問題構成より、いくつかの検討課題を取り上げることができる。まず、フーコディアン (Foucauldian) のテキストから、組織理論への直接的な影響力が確認されているいくつかの問題領域について検討してみよう。

第1に、フーコーの著作は、組織理論分野において関心の強度が日々増していく「組織形態の同質性と異質性」というテーマとかがわって議論の素材を提供してくれる。あらゆる組織は、基本的に類似しているのか、それともおなじでないのか。組織はどのくらい独自の、また依存的なのか。また、どこまで一般化できるだろうか。以上のような疑問は、最近の文献から喚起されている認識論的、方法論的イシューとかがわって重要な問題領域を構成する。たとえば、マクケルビーとオールドリチ (McKelvey and Aldrich 1983) は、組織理論における2つの支配的なパラダイムの競争の問題を取り上げ、人口生態学的観点の有用性を検討する。彼らによると、従来の組織研究においては、組織の類似性が前提となって一般化が試みられたり、あるいは、あらゆる組織はそれぞれ特異であるゆえに、一般化はつつしむべきであるという立場が採られてきたと指摘する (McKelvey and Aldrich 1983: 101)。組織の類似性を前提とする観点は、組織の形態が産業組織であれ、商業組織であれ、あるいは、教育や他のどのような組織形態であれ、その管理過程は基本的に同じであると考える (Litchfield 1956)。一方、組織の差別性を強調する観点は、類似性の見解とは異なり、組織はそれぞれ独自性を持つ特殊な存在であるゆえに、一般化の説明は有用ではないと主張する。マクケルビーとオールドリチ (McKelvey and Aldrich 1983: 109) は、2つの観点を比較した上で、「差異パラダイム」の論争上の優位を示唆している。「より多くの組織研究者が多様な発生背景をもつ組織認識を前提に研究を進めているようだ。組織をいくつかの基本特性から捉え、類似性を主張する研究はそれほど多くない。」と述べている。

このような組織の概念化とかがわって、フーコーの観点を適用することは十分可能である。彼の豊富な経験的記述から、あらゆる組織は基本的に同一であ

るとする組織形態の類似性を主張するフーコーの見解を確認することは難しくない。フーコーは慎重に言葉を選びながら、「監獄組織は、工場、学校、収容所、病院といった他の組織と基本的には同じである」という(1979: 83)。上記の陳述に先立って、フーコーはお互いに似ていて、しかも独自の特殊性を保持している2つの事物関係は存在しないともいっている。そうなると、時間上、空間上、そして外部的な特徴が違うある事物に1つの命名だけを与えるのは言語の誤用に他ならない(White 1979: 94)。そもそも、「同一性(Sameness)」あるいは類似というのは、「差異(Different)」のある対象全体の分類を目指した言語的試みから展開されたものである。「差異のなかの類似」、あるいは「類似のなかの差異」というのは、科学的分類方式という同じ起源から生まれた考え方である。科学的分類方式では、高度に発達した合理性の表現としてのルールを適用させ、同一性を抽出する。そこでフーコーが問題にしているのは、このような分類方式が言語の比喩的用法(trope)を通じて行われる点である。人間の個性を類似性のもとで束ねて理解しようとすることは、人間類型の無数の多様性を減少させていく作業であり、基本的には階層化の試みとしての分類を通じ科学的ディスクリプターを形成する作業に他ならない(McKelvey 1982)。

かくして、「差異」を「同一性」に収斂させる言語的範疇における「組織」を理解する場合、監獄と工場、病院などの組織は、広く科学的に受容されうる同じ範疇の概念なのである。フーコーに把握される、近代「組織」とはその本来の差異が巧妙に縮小され、もっともらしく同一性へと引き上げられ、作り上げられた概念であって、組織本来の実体を説明してくれる概念ではない。フーコーは、監視社会における科学的階層化(組織化)の成り立ちを、適切に説明してくれるのである。

一方、このように対立する2つのパラダイムに対して、マクケルビーとオールドリッチは中立的立場の設定を探索する。「ある組織は、他のある組織に似ている(some organizations are like some other organizations)」という彼らの主張は、中庸(golden mean)の立場の表現として見受けられる。フーコディアン立場からは、全体化の原則に忠実した研究も、また個別組織についての詳細な経験的検証を中心とする研究も許容されていた。許容しがたいと疑問符が

付けられたのは、組織形態の階層的分類化や細分化といった近代科学的方法論であった。反面、マクケルビーとオールドリチの立場は、学問の包括性を高めようとした試みとして理解できる。組織形態の分類と記述の精度を改善できる研究方法を強調するのである。組織形態の同一グループ化をより洗練させ、または差別的条件をより明確にすることによって事実関係を捕捉できる可能性を向上させることが提案された (McKelvey and Aldrich 1983: 101)。しかし、彼らの主張は、「ある組織は、他のある組織に似ている」という命題に従い規範化のプロセスを考慮に入れると、たいへん疑わしくなってしまうのである。規範化とは、次のようなフーコーの見解からも分かるように、もっとも重要な権力の手段である。

ある意味で、規範化の権力は同質性を強制する。規範化の権力が個別化をもたらす場合とは、ギャップが測定可能な場合、レベルを決めることが可能な場合、特性が確定可能な場合、または他者に合わせることができ差異が有効に機能する場合などに限る... (Foucault 1977c: 184)

このように、「ある組織は、他のある組織に似ている」という観点は、一見もっともらしい主張のように見え、また普遍主義 (universalism) と特殊主義 (particularism) の両方の難点に対する専門家的妥協案の提示のようにも見えるが、専門家主義と学問は相伴うものであることを認識する必要がある。われわれは、雑多な課題対象をきちんとしたものへ、扱いしやすいように、階層的に秩序化することによって、学問の包括性の確保に貢献できるのである。

フーコディアンのインプリケーションから組織を理解する場合、あらゆる組織は、表面的な特徴において異なる。しかし、基本的な力学関係から理解する限り類似している。「あらゆる組織は、ある個人に対して、またある時点において、似ていて似ていないのである (They are all-unlike and all-alike at one and the same time)」とされている。すなわち、組織は考古学、系譜学の方法論で研究される必要があるのである。

第2に、トータル・インスティテューション (total institutions, Goffman

1961)の議論と関連してフーコーの観点の適用妥当性の問題がある。とりわけ、ギディンス(Anthony Giddens 1984)は、この問題を取り上げた張本人であるが、時間と空間の観点からフーコーの見解を攻撃している。ここでは、監獄は極端な組織形態であって、したがって現代組織の典型を論ずるための素材として適切でないと批判されている。特定組織は、フーコーも認めているように、それ自体「完全で厳格な制度」であって、他の組織とは全く異なる。ギディンスは、この点についてのフーコーの観察に対し、次のように述べている。

組織は、それ自体完全で厳格な制度であるゆえに、現代社会の主たる制度的部門のなかで機能しているルールとは違い、またそれより例外的である。監獄や収容所は、監視の権力が極大化されているゆえに、他の組織よりその本質がより鮮明に現れている。たとえば、監視の権力の本質が他の組織においても監獄や収容所のように現れているとは考え難い... (Giddens 1984: 155)

トータル・インスティテューションにおいて、内部成員の生活は、時間的、空間的に完全で徹底的に統制されている。したがって、トータル・インスティテューションは、他の組織とは厳格に区別される。なぜなら、その組織の日常は内部成員のみを対象にして成り立っているからである(Giddens 1984: 184)。言い換えれば、トータル・インスティテューションとは、労働週間を通じ組織生活の経験が時間的、空間的に持続される組織形態である。単に、1つの組織に属しているのみの典型的な個人は、一日の労働の日課を終え、その組織世界と離れ家に帰れば、別の市民社会の非組織的経験に戻ることになる。ギディンスによって用いられている地理学的メタファーから理解すると、組織/非組織の空間的境界が大きな意味を持つことになる。しかし、このようなメタファーは制限的な有効性しか持たない。なぜなら、個人はただ1つの組織のみに対面し、関係を持ち、閉じ込められているのではなく、多数の組織と様々な関係で結ばれているからである。われわれは、時折組織の監視から脱出することができるのだが、また個人として組織世界に監禁されている。したがって、われわれはトータル・インスティテューションのなかに住んでいるのではないが、ま

たわれわれの生活の制度的組織はトータル的である。このような観点から、監獄に似ている工場、学校、収容所、病院を捉えるフーコーの見解が理解される必要がある。この点とかかわって、フーコーとウェーバーを関連付けることが可能である。ウェーバーの支配の官僚制的様式 (Weber 1947) は、支配の監視の様式そのものである (Smart 1983, 1985)。個人は、1つ組織の境界を往来できるが、結局のところ、いずれの官僚制的組織のなかに、あるいは少なくとも、官僚制との関連から形つくられ形成された空間のなかに、残されることになる。ウェーバーにとって、人間生活は、官僚制の「iron cage」のなかで営まれる。フーコーにとって、人間生活は、監禁の制度的枠のなかで存在しているのである。このような脈絡から人間生活を理解すると、空間の統制、とりわけ組織メンバーの生活の経路を規律する空間の統制は、今日重要な問題領域として登場してくる (Massey and Meegan 1982)。人間の進行中の活動、あるいは組織の境界のなかに固定された人間の位置、それ自体監視的支配様式の重要な証拠となるのである。

第3に、情報技術と知識工学の登場によって作られた理論的空間がフーコーの観点から照明されている (Poster 1984)。コンピュータ設計思想とネットワーキングによって展開されている新しいマイクロ・プロセッサ技術の発達は、パノプティコン (Panopticon) での統制様式の経験とかかわって、改めて監視体制の問題を喚起させてくれる。たとえば、視覚的観察の目的で工夫され用いられたベンダム (Bentham) の幾何学は、今日、電子的監視装置のタコグラフィックな性能に取って代わられるのではないか。

もう1つ、学問の包括性についての漸増する関心とかかわって、人間の性の統制の問題が重要性を増してくるように思われる。この領域は、組織分析の観点から労働の再秩序化を検討する形で議論が始まっている (Quinn 1977, Hearn and Parkin 1987)。修道院での時間の統制、現代工場における空間の統制、管理職務における性的差別の基づいた職務配分の問題などは、組織の非性化 (desexualization) という全体的なプロセスの動きとかかわって新しい問題をはらむ可能性がある。性の規範化は、時間的、空間的性の分離の問題をもたらさう。監獄組織、海のなかの船、商業企業などの組織は、性を抑圧しようとする

る側面において類似しており、またそういった試みの失敗が予定されている点において酷似している (Ignatieff 1978)。

参考文献

- Althusser, L.(1969), *For Marx*. Harmondsworth: Penguin.
- Bourgeois, C.C., and V.W. Pinder(1982), "Controlling tropes in administrative science". *Administrative Science Quarterly* 27: pp.641-651.
- Blake, M.(1982), *Human sexual relations*, a reader. Harmondsworth: Penguin.
- Clegg, S.(1981), "Organization and control". *Administrative Science Quarterly* 26: pp.545-562.
- Cooper, R., and G. Burrell(1988), "Modernism, postmodernism and organizational analysis". *Organization Studies* 9/1: pp.91-112.
- Daudi, P.(1986), *Power in the organization*. Oxford: Blackwell.
- Davidson, A.I.(1986), "Archæology, Genealogy, Ethics" in *Foucault: a critical reader*, D.Hoy(ed.), pp.221-233. Oxford: Blackwell.
- Donzelot, J.(1980), *The policing of families*. London: Hutchinson.
- Dreyfus, H.L., and P. Rabinow(1982), *Michel Foucault: beyond structuralism and hermeneutics*. Brighton: Harvester.
- Fine, B.(1979), "Struggles against Discipline". *Capital and class*. 9: pp.75-96.
- Foucault, M.(1973), *The order of things*. New York: Vintage.
- Foucault, M.(1975), *The birth of the clinic*. New York: Vintage.
- Foucault, M.(1977a), *Madness and civilization*. London: Tavistock.
- Foucault, M.(1977b), *The archaeology of knowledge*. London: Tavistock.
- Foucault, M.(1977c), *Discipline and punish*. Harmondsworth: penguin.
- Foucault, M.(1979), *The history of sexuality*, Volume 1. Harmondsworth: Penguin.
- Gane, M.(ed.)(1986), *Towards a critique of Foucault*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Giddens, A.(1984), *The constitution of society*. Cambridge: Polity Press.
- Goffman, E.(1961), *Asylums*. Garden City,N.J.: Anchor Books.

- Gordon, C.(1980), *Power/knowledge: selected interviews and other writings 1972-1977* by Michel Foucault. Briton: Harvester.
- Habermas, J.(1981), "Modernity versus postmodernity". *New German Critique* 22(winter): pp.3-18.
- Hearn, j., and W. Parkin(1987), *Sex at Work*. Brighton: Harvester.
- Hickson, D.J., Hinings, C.R., Lee, C.A., Schenk, R.E. and J.M. Pennings(1971), "A strategic contingencies theory of intraorganizational power". *Administrative Science Quarterly* 16: pp.216-229.
- Hoy, D.C.(1986), *Foucault: a critical reader*. Oxford: Blackwell.
- Ignatief, M.(1978), *A just measure of pain*. London: Mcmillan.
- Lemert, G.C.(1979), *Sociology and the twilight of man*. Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Litchfield, E.H.(1956), "Notes on a general theory of administration". *Administrative Science Quarterly* 1: pp.3-29.
- Mckelvey, B., and H. Aldrich(1986), "Populations, natural selection and applied organizational science". *Administrative Science Quarterly* 28: pp.101-128.
- Mckelvey, B.(1982), *Organizational systematics*. Berkeley: University of California Press.
- Massey, D.B., and R.A. Meegan(1982), *The anatomy of job loss*. London: Methuen.
- Melossi, D., and M. Pavarini(1981), *The prison factory*. London: Mcmillan.
- Minson, J.(1980), "Strategies for socialists? Foucault's conception of power" *Towards a critique of Foucault*. M. Gane(ed.)(1986), pp.106-148. London: Routledge and Kegan Paul.
- Mintzberg, H.(1983), *Power in and around organizations*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Morgan, G.(1980), "Paradigms, metaphors and puzzle solving in organization theory". *Administrative Science Quarterly* 25: pp.605-622.

- Pettigrew, A.(1973), *The politics of organizational decision making*. London: Tavistock.
- Poster, M.(1984), *Foucault, Marxism and history*. Cambridge: Polite Press.
- Quinn, R.(1977), "Coping with Cupid", *Administrative Science Quarterly* 22: pp.30-45.
- Rabinow, p.(1984), *The Foucault reader*. New York: Pantheon.
- Sheridan, A.(1980), *Michel Foucault: the will to truth*. London: Tavistock.
- Smart, B.(1983), *Foucault, Marxism, critique*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Smart, B.(1985), *Michel Foucault*. London: Ellis Horwood and Tavistock.
- Sunesson, S.(1985), "Outside of the goal paradigm: power and structural patterns of nonrationality". *Organization Studies* 6/3: pp.229-246.
- Weber, M.(1947), *The theory of social and economic organization*. New York: Oxford University Press.
- Weeks, J.(1981), *Sex politics and society*. Harlow: Longman.
- Weeks, J.(1986), *Sexuality*. London: Ellis Horwood and Tavistock.
- White, H.(1979), "Michel Foucault" in *Structuralism and since*. Sturrock, J. (ed.), pp.81-115. Oxford: Oxford University Press.
- Wolfe, D.(1971), *The uses of talent*. New Jersey: Princeton University Press.
- Ziman, John(1968), *Public knowledge: the social demension of science*. Cambridge: The Cambridge University Press.
- Zuckerman, Hattiet(1970), "Stratification in American science". *Sociological Inquiry* 40: pp.235-257.
- Zuckerman, Hattiet, and Robert K. Merton(1972), "Age, aging and age structure in science". in *The sociology of science*. pp.497-599. Chicago: The University Chicago Press.
- 【資料】
- Burrell G., "Modernism, Postmodernism and Organizational Analysis 2: The Contribution of Michel Foucault", *Organization Studies*, 1988, 9/2.